

I-FN効果予測が重要

C型肝炎治療 北大2教授ら講演

道癌談話会(会長・田中伸哉北大腫瘍病理学分野教授)の二十四年度シンポジウム「肝疾患最前線—C型肝炎ウイルスの基礎研究から発癌・最新治療まで」が九日、札幌市で開かれた。講演で

主・ウイルスの関わり」と題して講演。「C型肝炎で最も問題なのは非常に高い発がん率」と前置きし、「肝がんリスクを断つにはC型肝炎ウイルスを排除するしかない」と強調した。



癌談話会シンポで講演する坂本教授(上)と武富教授



松浦善治先生

インターフェロン治療効果に関連するウイルス側、宿主側因子を挙げ、インターフェロン感受性や低抵抗性についてのデータを紹介。「ウイルス排除に至った例では有意に発がん率が低下している」とした。

ウイルスを直接標的としたDAA薬剤開発により数年後の治療成績向上が期待されている現状を踏まえ、「遺伝子情報等を検査し、効果や安全性を見極めながら治療方針を立てるべき」と話した。

癌懇話会シンポ

療の課題と展望」で、肝がんは肝切除後も再発が起りやすく、術後インターフェロン治療が必須と説明。インターフェロンの効果が再発率や生存率に反映されるとした。また、肝移植の場合に

も術後早期にウイルスに再感染し、必ず再発するため、「それぞれの患者に対応した、遺伝子多型解析などのインターフェロン治療効果予測が重要」と強調。今後の課題として、①大規模試験に



サイエンストークでは多くの来場者が最先端の研究に耳を傾けた

よるインターフェロン治療効果予測②インターフェロン治療効果の向上③C型肝炎再感染の制御—を挙げ、内科との連携の意向を示し、坂本教授もこれに応じた。

み、米メモリアルス北、ローンケタリングがんセンター留学を経て、ル経路の分子

調査研究助成 応募受け付け 大和ヘルス財団 大和証券ヘルス財団

は、二十四年度調査研究助成の対象者募集を開始

最先端わかりやすく

北大遺制研初の

北大遺伝子病制御研究所(所長・高岡晃教授)は九日、初の一般公開を行った。各研究室の研究内容パネル展示や実験体験、サイエンストークなどを通じ、医学・生命科学の最先端を市民に分かりやすく紹介した。

研究成果を国民向けに説明するとともに、社会への還元活動として、若い学生や生徒たちに研究に触れる機会を提供して「科学離れ」を少しでも改善する趣旨で、北大祭と併せて開催した。

体験エリアでは細胞や酵母の観察、遠心機を使

死後画像診断

◇7◇

死因究明のための画像診断の積極的活用については、その有用性と問題点(限界)を明らかにした上での実施体制の整備が望まれる。検視業務に

予算が割り当てられている場合は、撮影そのものを受託してもらえないともいう。問題は設備的要件と人的要件に帰結するものと考えられる。

日本医師会の報告書で、日常診療に使用する診断装置では、感染防止や外来・入院患者への配慮

施設は本稿執筆時点で、道内では札幌大が唯一で、本邦では他に十数校の大学法医学講座で法医学解剖室に隣接した専用CT装置の設置がある。

生体と死体の違い、死後変化と画像所見、死体現象と画像所見を熟知した画像診断医の養成も急務であろうと思われる。

「死後画像診断のための研修を受けた放射線診断



同画像FPIGing.発Aiい合画FPIGing.発Aiい

は、死亡時画像診断一件断装置では、感染防止や外来・入院患者への配慮

「死後画像診断のための研修を受けた放射線診断

うことも一案と思われる。札幌大法医学講座は、スタッフ・大学院生・研修医を合わせ六人の医師が在籍する全国でも屈指の人的資源をもつ講座である。一般外科医、脳外科医、整形外科医として、業務として臨床画像診断に関わってきた者も含まれる。死因究明制度の見直しの議論をきっかけに、解剖医牛牧、倉

ては、従来と同様に体表検査のみの検案によって死因が診断されている現状であるともいえる。

法医学的な死後画像の今後としては、予算措置が関わる以上、どうしても国策を含む司法警察行

政の動きを注意深く見守っていく必要があると考える。教育機関としての大学の役割は、解剖検査所見と画像所見の対比をしっかりと精査し、科学的分析をしていくことにはかならない。社会貢献として法医学診断の精度向上に資することが目的である。

関しては、現在「検視に伴う画像検査依頼」として

は、死亡時画像診断一件断装置では、感染防止や外来・入院患者への配慮

「死後画像診断のための研修を受けた放射線診断

同画像FPIGing.発Aiい合画FPIGing.発Aiい